

ハワイにおけるピジン英語の発達に見る 日本の英語教育の可能性（Ⅲ）

——ハワイ英語の文法体系を展望しながら——

本 多 吉 彦* 鈴 木 邦 成**

The Development of Hawaiian Pidgin English and its Possible Application to
English Language Education in Japan, Part III:

A Study of Hawaiian Pidgin English Grammar

Yoshihiko Honda and Kuninori Suzuki

要 旨 本論文ではハワイにおけるピジン英語を分析、考察することによって外国語としての英語を学習する最善の方策を探っていくことを視野に入れ、まず標準英語の変種であるピジン英語全般の特徴を中心に分析し、ついでハワイの入植者や現地人が習得したピジン英語の文法体系と標準米語のそれとの相違についてハワイ英語訳の聖書の事例検証を踏まえながら分析、考察していく。

キーワード ハワイ英語 ハワイ英語による聖書 ハワイアン・ピジン英語

1. はじめに

本論文の最大の目的はハワイで話されているピジン英語（以下ハワイ英語）の文法体系を明らかにすることにある。本論文においては、Sakoda and Siegel (2003)¹⁾を参考にハワイ英語の文法体系の概要を紹介していく。そしてその中で、ハワイ英語には英語の持つ本来の言語メカニズムを非ネイティブであり、ハワイ固有の言語を持つ現地住民などが自らの言語論理をベースに簡略化、及び再構築を進めた結果、きわめて高い合理性が含有されていると考えられる。ハワイ英語とは決して、ハワイの現地住民の各人のその場の思いつきや場当たりの思考プロセスの中から偶発的に発生したものではない。その生成の根底には現地住民などの共通の文化的なバックグラウンド、あるいは母語の干渉などに起因する言語的なバックグラウンドが存在するということは否定できないと考えられる。その点の立証も含めて、以下でハワイ英語の文法体系の全貌を展望していくことにする。

* 本学助教授 英語・英語教育

** 本学非常勤講師 英語・英語教育

2. ハワイ英語の文法体系

2.1 ハワイ英語の定義

本論文で言うところのハワイ英語とはハワイにおいてピジン化、あるいはクレオール化され、発達した英語のことを指す。ただし場合によっては、ハワイ英語はハワイにおける標準英語の変種としての英語方言を意味することもある。

実際、ピジンとクレオール、そしてそれ以上の言語的完成度を持つ方言の明確な区別は容易ではなく、専門家の間でも意見の分かれることが多々見受けられる。例えば、ピカートンは、同じ論文の中で「ハワイ英語ピジン」という言い方と「ハワイ英語クレオール」という表現を用い、しかもこれは文脈からすると同じことを言っていると考えられる²⁾。また、ウォードハウの指摘によれば、「ピジンとクレオールは明確ではないが赤道地帯、それも海に面している場所や簡単に海に出られる場所に多く分布しているということである³⁾。ウォードハウの説に従えば、ハワイにおける現地人が使用する英語はピジン、あるいはクレオールの地理的分布条件を満たしていることにもなるわけである。

2.2 ハワイ英語の概略

ハワイ諸島において英語が初めて聞かれたのは1778年にキャプテン・ジェームズ・クックがカウアイ島に到着したときであった。以後まもなくハワイ諸島は太平洋の、特に日米、日中貿易の中継拠点として発展していくこととなった。そしてその過程で貿易、商業に使いやすいかたちで英語がピジン化し、発達していくこととなった。ハワイ英語の文法体系については以下のように詳述することができる。

2.3 動詞および助動詞

標準英語と同様にハワイ英語にも多くの熟語表現が存在する。これらの熟語は動詞と *awn* (*on*) *aet* (*at*) *ap* (*up*) *aut* (*out*) *awf* (*off*) などの前置詞が結びつき校正され標準英語とほぼ同じ意味を持つ。

また、標準英語とは異なりハワイ英語には動詞の時制に対する語形変化がない。そのために時制を表す語を用いて現在、過去、未来を表現する。その際、動詞の *plain form* (標準英語の原形に相当する) の前に *tense marker* を置いて時制を表すことになる。

未来形は標準英語においては主に *will*, *be going to* や現在進行形を用いて表すがハワイ英語においては *gon*, *goin*, *going* を助動詞として用い主語の直後に置かれる。過去形は *wen* を付与することによって表される。例えば、標準英語の *I saw him.* は、ハワイ英語では、*Ai wen si om.* となる。略式の日常会話においては *went* は *en* になる。なお、重度のピジン話者や高齢のハワイ語話者は *bin* を過去形に用いカウアイ島の出身者は *haed* を用いる。

標準英語と同様にハワイ英語においても過去の継続的な習慣は *used to* 「(以前は) よく～したものだ」を用いて表現する。高齢の話者の中には *used to* の後に原形を用いず、*to* 不定詞を置くも

のも存在する。

ハワイ英語における助動詞には能力や可能性を示す *kaen* (*can*)、意志や「何かをしたい」ということを示す *laik* (*like*)、外部からの圧力によって何か新しいことを現在、または将来行う、またはしなければならないことをほのめかすときに用いられる *gata* (*gotta*)、そして「～をしなければいけない」ということを意味する *gata* がある。さらに「何かをした方がいい、さもないと何か悪いことが起こる」ということを示す *betta* (*bettah better*)、現在、過去、未来の義務をほのめかす *supostu* (*suppose to*) がある。

2.4 形容詞および副詞

ハワイ英語の形容詞の特徴として名詞を形容詞として用いることが挙げられる。例として *haole* 「白人」を形容詞として用いる場合は「白人のように見える人・白人のように行動する人」という意味を持つ。

比較を表現する語として *mo* をハワイ英語では形容詞の前に置く。例えば標準英語の *bigger* はハワイ英語では、*mo big* となり、*skinner* は、*mo skini* (*mo skinny*) となる。ただし例外も存在する。*better* は、ハワイ英語では *mo baeta* (*mo better*)、*worse* は、*mo wrs* (*mo worse*) となる。この場合に限っては *mo gud* (*mo good*) や *mo baed* (*mo bad*) とは表現されない。また、*mo litobit* はハワイ英語においては *less* または *fewer* という意味で用いられる。このハワイ英語の *mo* は形容詞、修飾語、副詞の前に置かれる。

ハワイ英語の副詞の中には標準英語における *afterwards* と同義となる *afta*、標準英語における *always* と同義となる *everytime*、標準英語における *same time* と同義となる *sem taim*、標準英語における *later*, *eventually*, *finally*, *after a while* と同様の意味となる *bambai* (*bumbgye*, *by'm'by*) がある。標準英語の *After a while, the other girls came.* はハワイ英語の *Bumbye, da odda girls wen come.* となる。

またハワイ英語は特定の地名を表す固有名詞を副詞として用いる。例えば、ハワイ英語の *We come Hilo.* は、*We come to Hilo.* の意味になる。方角・方向を表す副詞としてハワイ語からの借入語の *makai* は「海の方へ」、*mauka* は「山の方へ・内陸の方へ」という意味で用いる。

標準英語では形容詞に *ly* を付けると副詞になる語は多いがハワイ英語においては形容詞を副詞として代用することが多いと言える。一例をあげると標準英語の *They walk slowly.* は、ハワイ英語では *They walk slow.* となる。

2.5 名詞および冠詞

ハワイ英語においては可算名詞を不可算名詞として扱うこと、あるいはその反対も起こりうる。つまり標準英語における可算名詞の複数形に *s/es* を付けることなしに複数として表現したり、不可算名詞であるにもかかわらず *s/es* を付けて複数化することも見受けられる。母音で終わる可算名詞は複数化される。また、ものの分量や数量を表す語においてしばしば複数化することが省略される傾向にあると言える。

さらにハワイ英語においては標準英語の不可算名詞が可算化されることが頻繁に起こる。なお、代名詞については Kent Sakoda and Jeff Siegel (2003) の文献に基づいてハワイ英語の代名詞を表にした。

表 1 ハワイ英語の代名詞

	主 格	所有格	目的格	独 立	再帰代名詞
1 人称単数	Ai (I)	ma, mai (my)	mi (me)	minz (mines)	maiseif (myself)
2 人称単数	yu (you)	yoa, yo (your)	yu (you)	yawz (yours)	yoseif/yuseif (yourself)
3 人称単数	hi (he), him	hiz (his)	him om (em, um)	hiz (his)	himself
3 人称単数	shi (she)	hr (her)	gr (her), om (em, um)	hrz (hers)	hrself (herself)
1 人称複数	wi (we), as gaiz (us guys)	awa (our)	as gaiz (us guys)	awaz (ours)	awaseif (ourself)
2 人称複数	yu (you), yu gaiz (you guys)	yoa/yo (your), yu gaiz (you guys)	yu (you), you gaiz (you guys)	yawz (yourz), you gaiz (you guys)	yoseif/yuseif (yourself)
3 人称複数	de (dey, they), dem gaiz (dem guys)	dea (their)	dem gaiz (dem guys), om (em)	deaz (theirs)	demself (themself)

(出典) Kent Sakoda and Jeff Siegel, *Pidgin Grammar An Introduction to the Creole Language of Hawaii* をもとに作成

ハワイ英語の代名詞の用法については、表 2 のように it の代わりに hi/shi を使用する用例もある。ただし、Kent Sakoda と Jeff Siegel の代名詞の研究においては、it についての説明は必ずしも十分ではない。これはハワイ英語における it の使用頻度が低いことに起因すると思われる。その他の特徴として代名詞の所有格は主語としても用いられる。

表 2 ハワイ英語の特徴的な用例

ハワイ英語 : Da stoa <i>hi</i> open nain oklak.	Da Klaes <i>shi</i> nat daet izi.
標準英語 : The store, it opens at nine o'clock.	The class, it isn't that easy.
ハワイ英語 : hu him? (Who him?)	huz san him? (Whose son him?)
標準英語 : Who is he?	Whose son is he?

(出典) Kent Sakoda and Jeff Siegel, *Pidgin Grammar An Introduction to the Creole Language of Hawaii* をもとに作成

ハワイ英語においてはしばしば単数名詞は冠詞なしに、さらに複数名詞は複数形をとらずに表現されることが多い。標準英語では *Dogs are loyal, not like cats.* もハワイ英語では *Dawg loyal, not laik kaet.* というようになり、標準英語が不特定な可算名詞の事物に言及する場合は複数形を用い

るのに対してハワイ英語は無冠詞かつ単数形を用いるという特徴がある。これに対して特定のものを言及する場合にはハワイ英語においても定冠詞が用いられると言える。

2.6 前置詞など

ハワイ英語には独特な前置詞が存在する。例えばハワイ英語の *awantap da teibol* は、*on the table* を意味する。また *insaid (inside)* は単に標準英語の *in* の意味で用いられる。ハワイ英語の *insaid da stawri* は *in the story* の意味する。また *infran (in front)* は *in front of* の意味で用いられ例えば *infrant eveibadi* とは、*in front of everybody* のことである。

加えてハワイ英語には標準英語では耳にすることがない語句を用いて語句を修飾する *postmodifiers* が存在し、*taim (time)*, *said (side)*, *kain (kine · kind)*, *gaiz (guys)*, *foks (folks)*, *dem* などがある。例えば *befo taim (before time)* は *in the past* のことである。また、*when we were little kids* は、*mawl kid taim (small kid time)* と表現される。*taim* は指示代名詞としても用いられ、*daet taim (that time)* とは *then*, *dis taim (this time)* とは *now* のことである。

以上のようにハワイ英語の文法体系を総合的に展望してきたが、ハワイ英語に表1に見られる代名詞の体系や *tense maker* を置いての時制表現のような高い規則性が存在することがわかる。加えて、標準英語における冠詞などの複雑性はハワイ英語では例えば、単数名詞には冠詞が使われないといった具合に簡略化され、重度のハワイ・ピジン英語話者にとっても容易に操ることが可能な言語へと変形していることがわかる。

3. 事例：ハワイ・ピジン英語による聖書

Pidgin Bible Translation Group による *Da Jesus Book*⁴⁾ は、ハワイ全島のピジン話者を対象としてのハワイ英語による新約聖書である。同書はハワイ英語の標準的な用法、用例を知る上で欠かせない文献といえる。同書の冒頭の英語版読者への解説にはハワイ英語話者を対象にしていることが明確に以下のように記されている。

It is intended for *those speakers of the Hawaii Pidgin Language* (sometimes called Hawaii Creole English) who find the English Bible difficult to understand. That is why this translation uses a heavier rural Pidgin than is normal for urban speakers.⁵⁾ (emphasis added)

ハワイ英語による聖書は、新約聖書の理解が困難なハワイ英語（ハワイ・ピジン語）の話者のために書かれ、この目的を果たすために重度のハワイ英語が翻訳に用いられている。

また、同書では米本土で話されている標準的な英語と同様にハワイ英語にも地域差があり、それは米本土の英語とは明らかに異なるものであるという事実についても読者に確認を求めている。さらに翻訳に用いられているハワイ英語はほとんどの地域の人々によって話されている標準的なものとなっていることに注目もする必要がある。

It should also be noted that the Pidgin Language differs slightly in different parts of the Island chain, just as Standard English differs in different parts of the U.S. mainland. The Pidgin used in this translation, though heavy, leans toward a common form that is understood in most of the areas where many people speak the language.⁶⁾

例えば、「ルカによる福音書」の冒頭 (Luke : 1-1, 1-2) については以下のように記されている。

Aloha, my friend Teofilus, Plenny guys wen write down da tings dat wen happen with us. Dey wen write down da stuff da odda guys wen see from da time Jesus wen start fo teach, an dey wen teach us an plenny odda peopo bout wat wen happen.⁷⁾

ハワイ英語における「ルカによる福音書」の冒頭 (Luke : 1-1, 1-2) は以下のような大意をくみとることができ、キリスト教や聖書の知識がない者であっても、またハワイの移民であり異教徒であっても聖書の大意を伝えることを可能にしている。

アロハ、わたしの友テヨフィロ、私たちとともに起こった事を、たくさんの人々が書き留めました。キリストが教え始めたその時から他の人々が見たことを彼らは書きとめました。そして何が起こったかについて彼らは他の多くの人々に教えました。

ただし、標準英語では該当箇所は以下のようになっている。

Dear Theophilus: Many people have done their best to write a report of the things that have taken place among us. They wrote what we have been told by those who saw these things from the beginning and who proclaimed the message.⁸⁾

敬愛するテヨフィロさま、わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を着けています⁹⁾。

なお、表 3 は、*Da Jesus Book* と新約聖書の「ルカによる福音書」(1-1, 1-2) について、ハワイ英語と標準英語の対比は表 3 のようになる。

表3 標準英語とハワイ・ピジン英語の比較

<i>Da Jesus Book</i>	新約聖書
plenny guys (plenty guys)	many people
wen write down	have done their best to write
wen happen	have taken place
with us	among us
wen write down	wrote
da odda guys (the other guys)	those who
from da time	from the beginning
Jesus wen start fo teach an dey wen teach an plenny odda pople	we have been told by those who proclaimed the message
wen see	saw
bout wat wen happenen	the message

(出典) 諸資料をもとに筆者が独自に作成

前述したようにハワイ英語では過去時制は *wen* + 動詞の原形 (plain form と呼ぶ) で表現され、標準英語における現在完了は過去時制で代用されている。ハワイ・ピジン英語訳聖書では前述した *wen* を使った過去形が頻繁に使用されるのである。

また他動詞の目的語としての *to* 不定詞は *fo work* (for work) というかたちで表されている。不定詞の副詞的用法は日本語に訳される時には「～するために」と訳されるために前置詞の *for* が代用されていると考えられる¹⁰⁾。ハワイ英語の語彙集として知られる *Pidgin To Da Max* によると標準英語における *to* 不定詞の副詞的用法はかなり高い頻度で *fo* (for) が用いられていることが紹介されている¹¹⁾。例えば、標準英語の “I was only trying to get to know you.” は、ハワイ英語では、 “Ah was on’y tryeen fo’ touch yo’ body.” となり、 “To get a high-paying position, one must be able to speak good English.” はハワイ英語では “Fo’ find one good job, you gotta know how fo’ talk like one Haole!” となる¹²⁾。

ハワイ英語には *dis* (this, diss), *daet* (that, dat), *diz* (there, dese), *doz* (those, dose) の4つの指示詞が存在する。また *diskain* や *daetkain* が指示代名詞として用いられることもある。標準英語の *This is the place.* は、ハワイ英語では *Dis da ples.* となる。*dis* に対して *daet* は名詞が続かない場合には *daes* (das) または *aes* (as) になることもある。*That’s my book.* は、ハワイ英語では、*Daes mai buk.* となる。このようにピジン訳聖書においても冠詞の法則性に注目することには重要といえる。

ピジン訳聖書には、*Bible Kine Words* も収められている¹³⁾。例えば、聖書の登場人物の一人であるアダムについての説明は、*Adam: da first man. God wen make him from da dirt.* となっている¹⁴⁾。また、救世主とは、*Messiah: one Hebrew language word dat mean “da one dey wen put oil on top him,” cuz dass how dey wen show who goin be da nex king, o da nex head pries guy. Da*

Greek kine word “Christ” mean same thing –Da Spesho Guy God Wen Send. Da Jewish peopo wen know he suppose to show up, but dey neva know wat time. Dass why, wen Jesus wen show up, had peopo dat wen figga he da Spesho Guy God Goin Send, an had odda peopo dat wen come huhu bout Jesus cuz dey figga, da Messiah guy gotta ack like one spesho king. English “Anointed One, Chosen One.”¹⁵⁾と解説されている。

4. ハワイ英語と日本人学習者との関連

ハワイ英語は日常会話から聖書のハワイ英語訳に至るまで幅広い範囲でハワイのコミュニケーション手段としての地位を獲得している。Sakoda and Siegel (2003) は、ハワイ英語がハワイにとって文化的にもまたハワイ住民の自己同一性の確立のためにも重要であるにもかかわらず、しばしば教育的プロセスにおいては無視されると述べながらハワイ英語が決して、「悪い英語」ではなく、標準英語を学ぶプロセスにおいて地域文化を理解する重要なツールとなりうることを強調している¹⁶⁾。

同様に日本においても日本人の地域特性、日本語の言語特性を踏まえた上で、標準英語を学ぶプロセスとして機能する重要なツールとして、日本人の学習者が学びやすい独自の英語表現を体得させていくという選択肢を存在させることも可能と思われる¹⁷⁾。それにより従来は正確性ばかりが重視される傾向にあった日本における英語教育に新しい方向性を示唆できると考えている。

今後は『ハワイにおけるピジン英語の発達に見る日本の英語教育の可能性 (Ⅳ)』において、ハワイ英語との共通点を十分に考慮した上でこのこれまでとは異なる角度から英語学習の効果をあげる方策を体系的に考察していくこととする。

5. 小活：ハワイ英語の役割と可能性

ハワイ英語の話者は減少傾向にあることが指摘されている¹⁸⁾が、ピジン英語としては高度に発達した文法体系に加え、文献としても聖書に代表される強固なバックボーンが形成されているわけである。

本論文においてはハワイにおけるピジン英語の考察を深めた。まず標準英語の変種であるハワイ英語の文法体系を明らかにし、ついで事例としてハワイ英語訳の聖書の存在とその内容を紹介し分析を行った。聖書訳の存在はハワイ英語の高い実用性、コミュニケーション性の強力な証左といえるだろう。

ハワイ英語には動詞、形容詞、副詞、名詞、冠詞、前置詞などにおいて標準英語とは異なる特徴を持つことが確認された。無論、ピジン英語と標準英語とのさまざまな面における相違点は、多種多様な世界各地のピジン英語からも理解できる。ハワイ英語もそうしたピジン英語のひとつと考えられることは言うまでもない。

そして標準英語とは異なる変種の英語とは言え、ハワイ英語は高い実用性、コミュニケーション性を有している。加えて標準英語を学ぶプロセスにおいても地域文化を理解する重要なツールとなりうるものである。

Works Consulted

- Andrew, Lorrin. *A Dictionary of the Hawaiian Language*. Honolulu: Board of Commissioners of the Public Archives of the Territory of Hawaii. 1922.
- Car, Elizabeth Ball. *Da Kine Talk*. Honolulu: University Press of Hawaii, 1972.
- Pride, J..B. *New English*. Rowley: Newbury House, 1982.
- Kuykendall, Ralph. *The Hawaiian Kingdom*. Honolulu: University Hawaii Press, 1967.
- Pidgen Bible Translator Group, *Da Jesus Book*. Orlando, Wycliffe Bible Translators, 1972.
- Sakoda, Kent and Jeff Siegel, *Pidgin Grammar An Introduction to the Creole Language of Hawaii*. Honolulu: Bess, 2003.
- Todd, Loreto. *Pidgins and Creole*. New York: Routledge and Kegan Paul. 1974.
- Tonouchi, Lee A.. *Da Kine Dictionary*. Honolulu, Bess Press, 2005.
- Valdman, Albert. *Pidgins and Creole Linguistics*. Bloomington: Indiana University Press, 1977.

(邦語参考文献)

- 池澤夏樹『ハワイ紀行 完全版』, 東京: 新潮社, 2000年
- 佐伯智義『科学的な外国語学習法』, 東京: 講談社, 1997年
- ロナルド・ウォードハウ『社会言語学入門』, 東京: リーベル出版, 1994年
- 矢口祐人, 『ハワイの歴史と文化』, 東京: 中央公論新社, 2002年
- 山中速人『ハワイ』, 東京: 岩波書店, 1993年

注

- 1) Kent Sakoda and Jeff Siegel.
- 2) *Pidginization and Creolization: Language Acquisition and Language Universals*. In Valdman, A. (ed.) *Pidgin and Creole Linguistics*. Bloomington: Indiana University Press.
- 3) ロナルド・ウォードハウ著, 田部 滋, 本名信行監訳『社会言語学入門上』(リーベル出版, 東京, 1994年) 84頁。
- 4) Pidgen Bible Translator Group, *Da Jesus Book* (Orlando, Wycliffe Bible Translators, 1972).
- 5) *ibid.*, v.
- 6) *ibid.*, v.
- 7) *ibid.*, 153.
- 8) 日本聖書協会『聖書』(日本聖書協会, 2005年), 新約聖書, 132頁。
- 9) 前掲書, 132頁。
- 10) Kent Sakoda and Siegel, 45.
- 11) Douglas Simonson, Pat Sasaki, Ken Sakata, *Pidgin To Da Max 25th Anniversary Edition* (Honolulu, Bess Press 2005) 43.
- 12) ハワイ英語においては前置詞 to は不定詞よりも「～へ」という前置詞としての意味合いが強く, 原形という概念が存在しない。加えて不定詞の名詞的・形容詞的・副詞的用法という3つの複雑な用法を英語の文法的な知識のない移民たちには習得困難であった。
- 13) *Da Jesus Book*, 721-744.
- 14) *Ibid.*, 721.
- 15) *Ibid.*, 733.
- 16) Sakoda and Siegel, 109.

- 17) 本多吉彦, 鈴木邦成, ロバート・ヒックリング・土屋武久『ブローケン英語 NOW!』(東京, 明日香出版, 2004年)を参照のこと。ピジン英語の発達の過程に対する検証を踏まえ, 英語学習の初学者を対象に基本的な動詞の応用範囲を広げ, 英語の諸規則を単純化させて理解し, 短文で日常会話を修得することを目指す。
- 18) Lee A. Tonouchi, *Da Kine Dictionary* (Honolulu, Bess Press, 2005) iii.